



文部科学省

「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」

# 学生支援 GP

卒業成長値を高める『10の底力』



文部科学省

「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）」

# 卒業成長値を高める『10の底力』

## 一人ひとりのニーズに合ったオーダーメイドのキャリア教育

このプログラムの最大の特色は、通常の授業において、その分野の専門的知識だけでなく、社会で必要とされる基礎力「10の底力」を身につけることができる点にあります。これは、少人数による対話型の授業形態と、授業担当者による教育方法の創意工夫によって実現することができます。

学生たちのキャリア形成に必要な能力として設定した「10の底力」とは、①コミュニケーション能力、②プレゼンテーション能力、③ディスカッション能力、④国際感覚・多文化理解能力、⑤外国語運用能力、⑥調査能力、⑦IT能力、⑧クリティカル思考、⑨コンセンサススキル(問題発見・提案・実行力)、⑩自己理解能力です。

### 文部科学省による選定理由

東京女学館大学において、その教育目標「国際的な視野とリーダーシップ能力を身につけた女性の育成」の実現のために、少人数による双方向型授業を実施して学生に高いコミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身につけさせ、修学支援の成果を上げていると言えます。また、今回申請のあった「卒業成長値を高める『10の底力』」の取組は、「10の底力向上プログラム」を導入して個々の学生の就職・進学支援を充実させることを目的としたものです。このプログラムでは、それぞれの学生が「10の底力」リストの中から特に伸ばしたい項目を選び、それに合致する授業を受講することによって個々の底力の育成が可能となるよう企画されています。この取組は、個々の学生を対象にしたオーダーメイド型のキャリア教育支援であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。

### 学生支援 GP とは

文部科学省による大学教育改革の支援の一環として、学生の人間力を高め人間性豊かな社会人を育成するため、学生の視点に立った独自の工夫や努力により特段の効果が期待される取組を含む優れたプログラムが選定されます。

2008年度は、応募のあった230件の中から本学を含め、23件が選ばれました。



文部科学省  
「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム」

## 学生支援 GP

### 卒業成長値を高める『10の底力』

1

#### コミュニケーション能力

相手の意見や気持ちを理解できる。理解するために上手に質問したり、自分と異なる意見を持つ人に自分の考えを表現できる。

実践例 体育

二人組やグループ、チームでコミュニケーションをとりながら身体活動を行うことによってコミュニケーション能力の向上を目指します。

その他 ● 情報基礎演習 ● 総合英語 ● 日本語文演習  
● 異文化間コミュニケーション など

3

#### ディスカッション能力

相手の主張や論点を理解し自分の意見を適切に説明できる。十分な知識を持ってディスカッションを円滑に進行できる。

実践例 ボランティア活動と政策

毎回文献担当を決め、担当者はレジュメ作成と全体の司会を行ないます。小グループの討論発表、レジュメ発表、全体討論を進めていきます。

その他 ● 教育社会学 ● 情報社会論  
● 家族とジェンダー など

4

#### 国際感覚・多文化理解能力

外国に対する地理的・歴史的知識、実情や文化に対する情報収集力がある。文化の多様性を理解する柔軟な思考を持つ。

実践例 文化人類学

さまざまな文化における家族システム、教育システム、儀式とライフサイクル、民族の多様性について学びます。

その他 ● 哲学 ● 国際関係論 ● 文化摩擦  
● 英文学概論 など

コミュニケーション能力を高める



2

#### プレゼンテーション能力

自分の見解を図版や画像を用いて的確に要約したプレゼンテーションができる。第二言語によるプレゼンテーションが行える。

実践例 米文学概論

発表担当者は発表内容についてプランを立て教員と打合せをしながら準備します。他の学生はプレゼンテーションを評価、自分の発表に役立てます。

その他 ● インターンシップ実習 ● 経営戦略論  
● 地域研究(ヨーロッパ) など

5

#### 外国語運用能力

外国語を読む、聴く、話す、書く能力。また基本的な文法を理解し活用できる能力。TOEFL、TOEIC にてスコアアップを図る。

実践例 比較国際教育

毎回の授業においてアメリカの教育問題に関する英文文献を用い、英語の読み書き能力の向上を図ります。英文読解の予習は成績評価の4割を占めます。

その他 ● 環境社会学 ● 中国語 ● ハングル  
● 国際開発 など

プレゼンテーション能力を高める



ディスカッション能力を高める



9

### コンセプチュアルスキル（問題発見・提案・実行力）

課題を分析・問題発見できる。また、解決方法を見出せる。そして、行動計画を立て実行に移すことができる。

#### 実践例 経営戦略論

経済誌などに掲載された企業の記事を用いてケーススタディを行います。問題の選定、その企業の優れている点、改善点、弱点を討議します。

- その他 ● 人材育成論 ● 日本の伝統文化  
● 民俗学 ● 科学技術リテラシー など

6

### 調査能力

調査の基本知識および調査方法の基本を習得。統計学を理解し、量的なデータ解析方法を用いて報告書を作成できる能力。

#### 実践例 地域研究（中東・イスラム圏）

書籍、新聞、雑誌、TVニュース、大使館資料、諸機関紙、各国外務省HP等の媒体を活用して調査能力を高めます。

- その他 ● 統計処理法演習 ● 心理学研究法  
● 経済政策 ● 宗教学 など

10

### 自己理解能力

失敗したとき、不満や怒りを感じたとき、自分と向き合うことができる。自分の長所と短所を知っている。

#### 実践例 社会心理学

日常生活に関連した具体例を紹介し、テーマごとに自分自身の体験に基づいた事例を答えさせ、自己理解を深める課題を設定します。

- その他 ● キャリアマネジメント ● 発達心理学  
● 人間形成と教育 など

7

### IT能力

コンピュータをセットアップでき、ワード、エクセルなどを使いこなせる。ホームページの作成・管理ができる。

#### 実践例 国際情報論

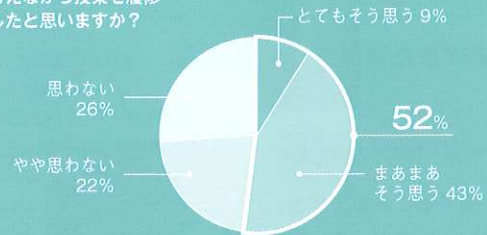
世界のインターネット利用状況を分析し、各地域の情報格差や問題点を理解した上で、国レベルのIT戦略を考えIT能力を向上させます。

- その他 ● マルチメディア論 ● 心理学実験  
● 情報ネットワーク論 など

学生アンケート（2008年実施）

Q1

自分が身につけたい能力を  
考えながら授業を履修  
したと思いますか？



8

### クリティカル思考

じっくり観察し、いろいろな原因を探ることができる。物事を多面的にとらえ、情報を収集し、客観的に判断して結論を出すことができる。

#### 実践例 言語学

アメリカの教育現場での言語政策、少数民族の言語などのテーマに関し、できるだけ異なる立場、時には対立する意見や理論を提示して考えさせます。

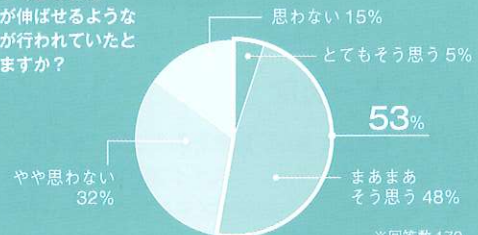
- その他 ● ベンチャービジネス論 ● 生命の科学  
● リーダーシップとジェンダー など

学生アンケート（2008年実施）

Q2

10の底力を伸ばす授業を履修した学生への質問

身につくと思われた  
能力が伸ばせるような  
授業が行われていたと  
思いますか？



このプログラム実施の流れは、図1の通りです。まず授業担当者は、担当する授業において伸ばすことのできる「底力」を2つ選び、学生がその能力を伸ばせるように考えながら授業を行います。そして、Semester終了後に受講生一人一人について「底力」の成長度を評価します。一方学生は、それぞれの授業で身につく「底力」を参考に授業を選択し、Semester終了後に自己評価を行います。教員による評価と学生自身の評価の合計点はSemesterごとに学生に提示され、学生は次のSemesterの履修の参考にします。合計点は成長値として加算され、4年後に「卒業成長値」（入学から卒業までに伸びた力）として本人に手渡されます。一人一人が自分のキャリアを考えながら必要な基礎力を伸ばしていくという点で、このプログラムは、「オーダーメイドのキャリア教育」ということができます。学生が「底力」を伸ばすために重要なことは、教員・職員が学生の能力を高める効果的な指導方法を身につけ、授業などで実践することです。そのためのFD (faculty development) ・SD (staff development) の充実にも力を入れています。

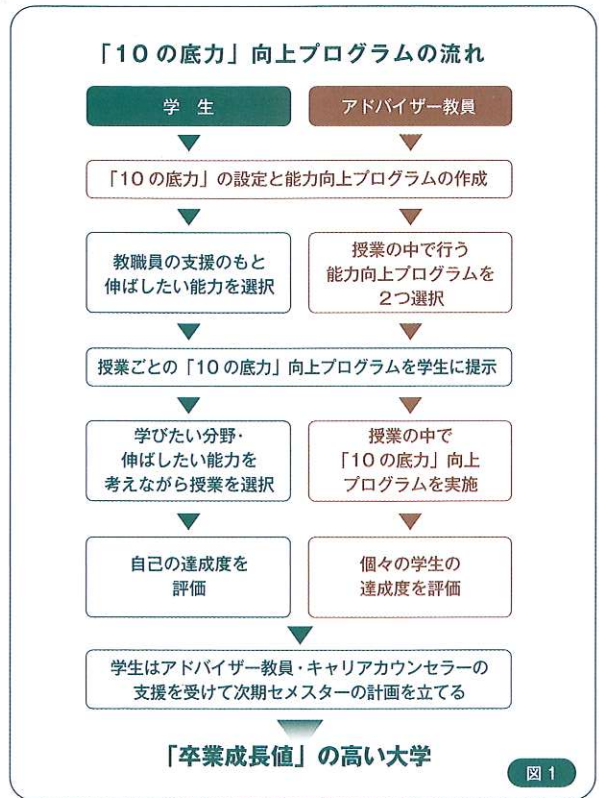


図1

## 成果をあげるための3つの仕組み

### 1 FD・SD体制の充実

授業や各種行事において学生の「底力」を高めるため、教職員は効果的な方法を学んでいます。初年度は、学生のコミュニケーション能力(写真1)とプレゼンテーション能力(写真2)を向上させる教育方法に重点を置き取り組んでいます。



写真1



写真2

### 2 アドバイザー制度

学生1名に対して教員1名が、履修計画や進路に関するアドバイスをを行います。キャンパスライフ全般にわたり幅広く相談に応じながら、学生の満足度を高めます。

### 3 「10の底力」評価方法

Semester終了時には全受講生にそれぞれの能力がどの程度伸びたかについて、2(身についた)、1(やや身についた)、0(変わらない)による自己評価をさせるとともに、授業担当教員も2、1、0で学生の到達度を評価します。その結果を見ながら学生は、アドバイザー教員・キャリアカウンセラーとともに、次はどの能力を向上させたらよいかについて検討します。教職員と学生が一体となりキャリア教育の充実、卒業成長値の把握、学生満足度の向上への寄与について考えることによって、学生のニーズに合ったキャリア開発支援を展開します。

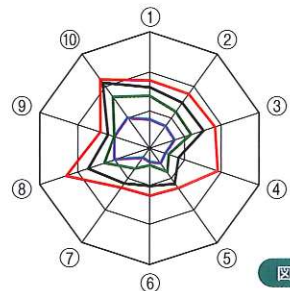


図2

学生に提示されるSemesterごとに加算された「卒業成長値」の例①～⑩は「底力」の番号に対応

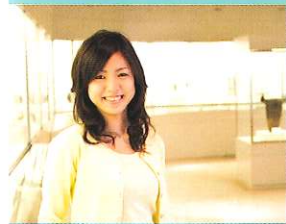


## TJKCが目指す「顔の見える」教育

2008年に東京女学館は創立120周年を迎えました。伊藤博文や渋沢栄一といった近代日本の礎を築いた人々が創立時に掲げた「国際性を備えた知性豊かで気品ある女性の育成」という教育理念は、今も色褪せることなく、小学校から大学まで女子一貫教育機関のアイデンティティーとしてしっかりと息づいています。その女学館の長い歴史に新しく加わったのが、2002年に開学した東京女学館大学です。

東京女学館大学の最大の特色は、その徹底した少人数教育です。授業のほとんどが20名以下だからこそ実現可能なのは、学生一人ひとりの「顔の見える」教育です。この少人数による対話型の授業形態と授業担当者による教育方法の創意工夫によって本プログラムが実施されています。

120年前に東京女学館が掲げた理想の女性像は、今なお、社会から求められています。これからも、そういった社会のニーズを敏感にとらえ、学生一人ひとりのキャリア形成を支援していきます。



### HISTORY

#### 120年の歴史は、時代をリードする女性たちのために

- 1886(明治19)伊藤博文を委員長とする女子教育奨励会を発足
- 1888(明治21)東京府知事より東京女学館設立の認可
- 1900(明治33)高等女学校令に準拠し、5年の普通科、2年の高等科をおく
- 1918(大正7) 母校の後援と卒業生相互の親睦を図る白菊会を結成
- 1929(昭和4) 小学校を開校
- 1930(昭和5) 女子教育奨励会解散、財団法人東京女学館発足
- 1947(昭和22)学制改革に伴い、中学校認可開校
- 1948(昭和23)学制改革に伴い、高等学校認可開校
- 1951(昭和26)財団法人東京女学館を学校法人に改組
- 1956(昭和31)短期大学(文科)認可開校
- 1995(平成7) 短期大学学科改組(国際文化学科、情報社会学科)
- 2000(平成12)平成13年度短期大学の学生募集停止
- 2002(平成14)東京女学館大学国際教養学部開学
- 2008(平成20)東京女学館創立120周年



東京女学館  
創立委員長  
伊藤 博文

## 東京女学館大学

〒194-0004 東京都町田市鶴間 1105

学生支援GPルーム TEL. 042-796-9231 FAX. 042-799-2652

E-mail: [gakugp@m.tjk.ac.jp](mailto:gakugp@m.tjk.ac.jp)